



我が母校：医学部50年史と図書館ステンドグラスによせて（退官教授の歩み）

岡田，安弘

(Citation)

神戸大学医学部神緑会学術誌, 15:51-52

(Issue Date)

1999-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81007599>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007599>



退官教授の歩み——

我が母校

——医学部50年史と図書館ステンドグラスによせて——

前神戸大学医学部生理学第一講座教授

神戸大学名誉教授 岡田 安 弘 (37年卒)



私が神戸大学医学部に着任して18年が過ぎ、はや退官を迎えた。時間は知らないうちに過ぎ去るというが、18年、いやそれよりずっと以前この大学で学生時代を謳歌した頃から、43年の歳月が全く無意識のうちに過ぎ去ってしまったような気がする。

篠山での自然とともにあった教養時代の生活、女学校を改造したあの基礎校舎の講義と実習、木造の臨床講堂、そして新しく建った大学院のための校舎、自治会やクラブ活動で思う存分活動したこと（そのうちの三つ…コーラス、ESS、ドイツ語研究会は今もまだ現役として活動が続けている）、横須賀の米国海軍病院でインターンをしたあと、母校には帰って来ないで脳生理学を専攻したこと、そのために東京、St. Louis, Frankfurt/M など様々な土地を転々としたこと、そして18年前母校の生理学講座を担当すべく胸ふくらませて着任したら、長期間にわたるしかも無意味な教授排斥運動に直面したこと、そして長年その障害と静かに闘わねばならなかったこと、しかし研究と教育の内容については決してどの教室にもひけをとらないレベルに発展させたこと、中枢神経系におけるGABA やアデノシンの役割や、脳組織のエネルギー代謝と神経機能、さらに膵臓のGABAと糖尿病など様々な研究に没頭しながら、学生に「生命とは何か」というギリシャ哲学にはじまる生理学の教育をしたこと、神戸大学医学部

創立50周年にちなんで、神戸大学医学部125年の歴史を1030頁にわたる「神戸大学医学部50年史」(図1)として編纂し発刊できたこと（この出版には神緑会の方々の大きな御援助をいただき心より感謝しております）、医学部図書館長として、新しい図書館の設計、新築に携わったこと……。

今の私にとっては、それらは一本の長い時間の流れとしてでなく、質量をもった一つの点として感じられる。それら一つひとつの出来事の意味を考える必要はもうないかも知れないが、確かなことはそれら全てが立体的に融合して今の自分の形成に関与していることだ。そしてもう一つ確かなことは、私が母校が好きであったことだ。決して国粹主義的な気持ちではないが、私は母校を誇りに思っていた。私が学生諸君と相対する時も、教授会で発言する時も常に母校

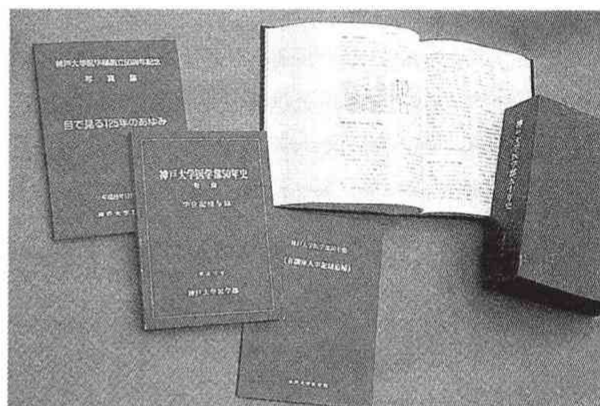


図1 神戸大学医学部創立50周年記念に出版された「神戸大学医学部50年史」。これらは年史（本文1030頁）、附録（学位記授与録261頁）、写真集（目で見える125年のあゆみ139頁）のほか、50年史出版後人事記録を追補した各講座人事記録追補(30頁)からなる莫大なものであった。

の学問的なレベルを上げ、少しでも母校を良くしたい気持ちを持っていた。そのことが生理学講座の困難な状況にひるむことなく立ち向かわせてくれたし、私を東京やアメリカ、ヨーロッパそして他の国々に駆りたてたのかも知れない。

私は自分のこれからの方向について、私が今迄研究し、経験してきた生理学、生命科学の自然科学的アプローチの上に、生命の意味を考え

るべく、京都大学大学院で哲学と生命倫理の勉強を始めることとした。

今退官するにあたって、自分を育ててくれた母校に感謝しつつ、自分の現在の気持ちを三枚の絵にして、新しい医学図書館にステンドグラス（図2）を寄贈させていただいた。そのステンドグラスの題は「生命といのち」とした。学生諸君が良き医師に成長したとき、このステンドグラスを見て私の講義の意味を、そして医学とは何かを理解して下さることだろう。

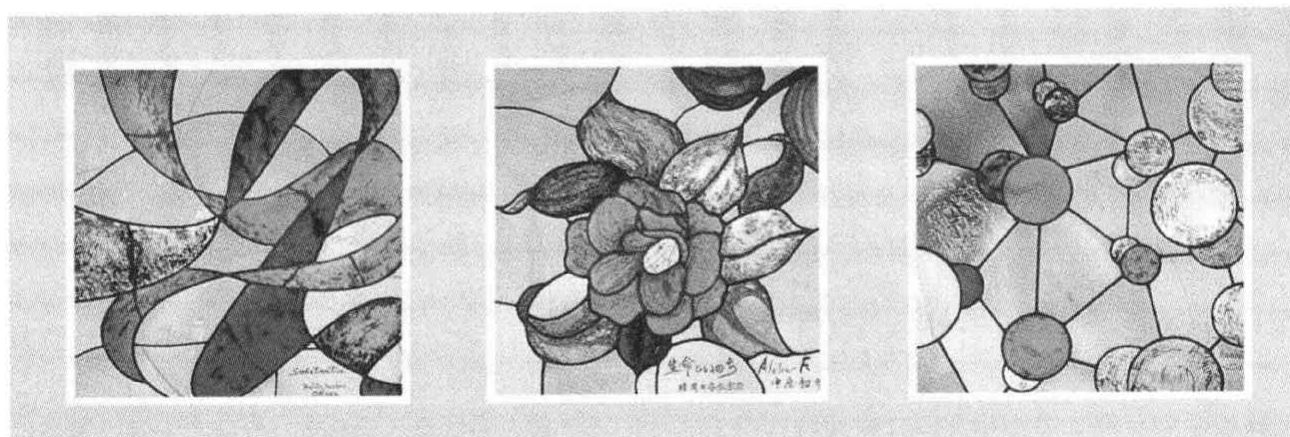


図2 退官記念として私がデザインし、医学図書館に寄贈したステンドグラス（一枚 116cm×116cm）。左の絵の図案はDNAの二重らせん構造を示しており、生命の物質的側面であることから substantia（実体）をテーマとした。右の円と線の構造はシステムとしてのホメオスタシス（homeostasis）を示し，attributum（属性）とした。中央には紅い椿の花を描いた。紅い花には紅い花の遺伝子が、花びらの形の違いには異なった花びらの遺伝子が関係しているだろう。そしてそれらの物質と物質のつながりが系をつくり生命を形成していると言えるだろう。しかし生命を構成する物質を全て寄せ集めて系をつくらせたら、紅い花、紅い生命といのちができるだろうか。紅い花の生命といのちは紅い花の中にあり、花全体の中にある。このことからこのステンドグラスの題を「生命といのち」とさせていただいた。

